

Fenella Cannell,

*Power and Intimacy in the  
Christian Philippines.*

Cambridge: Cambridge University Press,  
1999, xxvi + 312 pp.

かわだ まきと  
川田牧人

I

近代個人主義の手本とされてきた西洋では食卓に個人の所有観念がみられないのに、なぜ箸や茶碗、湯呑みといった日本の伝統的食器は個人専用なのだろうか、という問いを発したのは高取正男であった（高取 1975）。そこには分析的言語で論理化できない生活意識や感覚が深くかかわっているのだが、ここでは、このような問いを発する視角にまず着目したい。

ひとたび指摘されてみると、たしかに家庭や職場で誰々さんの箸、茶碗、湯呑み、と定められた食器は決して間違っただけではないような禁忌の意識の深さがあることにあらためて気づかされる。しかし、われわれがふだん何気なく行っているような行為や感覚や、それらで成り立っている生活世界そのものについて問いを発するには跳躍力が必要である。本書『フィリピン・キリスト教徒の力と親密』における著者の立脚点とは、まさにこのようなものである。ここで描かれるのは、嫌々ながら結婚した夫婦の長い連れ添いであり、特別な催しのない普通の葬式であり、ニューハーフの美人コンテストである。これら諸事象はまさに、フィリピン人にとっての「当たり前」であるといえよう。

このような「当たり前」がこれまでのフィリピン研究でまっとうにとり上げられてこなかった理由は、対象化するのが困難だからという以外に、従来のフィリピン研究の前提そのものにも求められる。たし

かに政治・経済の分野に比べれば、低地キリスト教徒フィリピノの社会についての民族誌研究が質量ともにボリュームアップされてきたのは近年のことであり<sup>(注1)</sup>、これまでフィリピンの民族誌といえどもっばら、北部ルソン山岳地域の少数民族研究かミンダナオ・ムスリムの研究が成果を上げてきた。研究対象にこのような偏りがみられたことの意味については後にもう一度ふれるが、そういった状況において本書は、低地社会の日常生活に関する詳細な民族誌であるという位置づけを確実に占めるものである。

著者フェネラ・キャンネルは、近年興隆しているヨーロッパにおけるフィリピン研究<sup>(注2)</sup>の一翼を担う人類学者であり、ビコール (Bicol) 地方の町カラバンガ (Calabanga) で、1988年3月より翌年12月までの約21カ月にわたるフィールドワークを行った。本書は、この現地調査にもとづく博士論文「フィリピン・ビコール村落におけるカトリシズム・霊媒・理想的な美」をさらに展開させたものである。

II

本書は序論につづく4部で構成されており、第1部では親や近親者によって手配された半強制的な結婚、第2部では民間医療を司る呪医と精霊との関係、第3部では死者への哀悼とキリスト教聖像への態度、第4部では男性であることに違和感を主張する女装者の美人コンテストがそれぞれ扱われている。第4部には全体の結論もおさめられている。章も含めた構成は以下のようになっている。

序章—山地と平地

第1部 婚姻

第1章 婚姻の語り—不本意と監督を語る

第2章 親族と結婚の儀礼化

第2部 治療と精霊

第3章 序論—治療と「素寒貧なひとびと」

第4章 霊媒と精霊のパートナー

第5章 霊媒と施術の形態—霊的世界との関係の  
変化

第6章 結び—精霊の誕生会

第3部 聖者と死者

第7章 生者と死者

第8章 「キリストの遺骸」の葬送

第9章 親族、互酬性と聖者への献身

第4部 美人コンテスト

第10章 美と「アメリカ」の観念

第11章 結論—抑圧、憐れみ、変容

本書で対象となるのは、ピコール地方のふつうの人々、著者が「素寒貧なわれら」(kami mayong-mayo)と表現する人々である。彼らは対他意識および過去との相対的比較において、自らを植民地支配による政治権力をはじめとするさまざまな力から隔絶した「無力な」存在であると自己規定する。

このような力の偏在と不均等な社会構成は低地キリスト教フィリピノの社会において顕著にみられる特徴である。たとえば本書第8章で述べられている墓地の景観などは、地方の町や村で容易に観察できる顕著な例である。「素寒貧なわれら」はモルタル管体を数段積み上げた集合住宅ならぬ集合墓地に納められるのに対し、墓地の一画には屋敷地を模して前庭や華美な建造物をともなった墓陵がみられるのである。このような社会における生活戦略はしたがって、個々の語りにおいて力との距離関係を融通させたり哀れみや抑圧・親密といった感情を交わすことによって、このギャップをどう埋め、いかに力と折り合いをつけるかに焦点化される。本書のタイトルに「力と親密」というテーマが掲げられているのはこのためである。

第1部「婚姻」ではまず、親や近親者の一方的な決定によって本人は不承不承ながら嫁入りしてしまう女性の語りを紹介される。このような結婚を経験した女性の生活感情は、「我が文化は然々」といった仰々しい表明ではなく、日々のおしゃべりでさりげなく表現されるというのが、著者が語りの資料をあつかう根拠となっているのだが、そこで語られるのは、女性がいかに男性(親族)に対して従順でなければならないそのため嫌々結婚するかについてである。しかし結婚を結果としてではなく過程として考える女性たちは、最初は乗り気でなくても、共住して食事を共にし、やがて子供を出産・養育するよう

になると、この不当な扱いに対する感情が変化していく。

この問題を歴史的文脈におくと、スペイン的父権主義と夫方妻方双方のシブリング(sibling)間の連帯的關係による協調主義のせめぎ合いが折り合いをつける過程であり、また親族の側面からは、無限に延長されるシブリングの紐帯を選択的に再編成する過程であるとも解釈される。これらの過程は演劇的に儀礼化された結婚交渉(bahon)に見出すことができる。このような結婚のシステムには明らかに力の不釣り合いがあり、しかも絶対的なものではなく容易に反駁されるような力関係においては、ことばによるかけひきが不可欠であり、それによって村じゅうすべてが「キョウダイみたいなもの」「親戚同然」といった認識にいたるのである。

第2部「治療と精霊」では、このような言語交渉が呪医と精霊との関係において検証される。ピコール地方にあって「不可視の人」(tawo na dai ta nahihiling)と表現される精霊は、とりわけ憑霊や呪力にもとづく治療師(parabulong)と特殊な関係にたつて治療行為の手助けを行う場合、“saro”と呼ばれる。両者の関係は表面上は共感に満ちたものであるが、それは精霊との交渉の初期段階でのことであり、呪医の多様な語りの中には、結婚における女性の語りと同様な不本意と恥の感情が読みとれる。これらの感情は、不釣り合いであり距離もある力と親密にならなければならないときに感じる気後れでもある。この意味合いにおいて、呪医と“saro”との交換は、共感と不本意、愛着と抑圧といった感情のやりとりとして理解しなければならない。

人と精霊との関係がこれらの感情を含んだ襲のある語りとして提示される以上、そこに構造化された関係概念を見出すことは難しい。もちろんこれには地域差があつて、たとえばパナイ島の“ma-aram”とよばれる宗教者の実践には、知識の正統性と権威の発生を読みとることができる。しかしピコール地方では呪力や憑依能力と知識の正統性や権威との繋がりが希薄であり、歴史的文脈においてもカトリシズムが土着の権力をも包含した植民地権力を形成しようとする試みは成功していない。精霊が非カトリ

ックの要素であり、それをカトリックの枠組みで解釈しようとしたときに「悪魔」としての位置づけができないのは、カトリック／土着という対比自体が意味をなさなくなることを意味している。

この対比の空洞化は、第3部「聖者と死者」に持ち越されて論じられる。ピコール地方の死にまつわる実践においては、キリスト教化の段階において受容されたとされる天国の観念にもまして、屍肉を食らうとされるアスワン (aswang) や死者霊の現世への再来の観念などが色濃く見出される。しかしこのことは、西洋的価値に照らして「迷信」として話されることと実際に行われることのギャップとして観察されるのであって、先スペイン期の残余としてかすかに存続しているのではない。むしろこれらの実践はカトリシズムを起源とする儀礼にこそ見出される。カラバンガでもっとも人気を博する聖像「キリストの遺骸像」(Amang Hinulid) への聖週間を中心とした手厚い世話と儀礼から、通夜としてのパシオン (pasyon) の誦唱、葬儀としての聖像行列といった並行関係が見出せるのである。

するとここに、生者・死者・聖者の3者には厳密に区別された関係が想定しにくいという状況が生じる。実際ピコールの日常生活においては、死後の観念の曖昧さ、聖像の持つ凝集力と循環的側面、聖人への願かけ (promesas) など多様な交渉と交流の多様な回路が用意されている。それは負債 (utang) というより扶助 (tabang) という概念で捉える方が適切である。金銭貸借において、ピコラノ (Bicolano) 農民は「外部の」貸与よりも「内部の」貸与をより好む。それは額の多寡による判断ではなく、支払期限の延長をはじめとするさまざまなネゴシエーションが可能であるからである。この「内部の」扶助関係を緊密化することは、親戚同然の関係を拡大することであり、それはついには精霊や聖人との関係においても求められる。

第4部であつかわれる「美人コンテスト」は、女性ではなく女装男性 (bakla) コンテストであり、地方都市の祭礼では必ずといっていいほど目にするのできる「華」であるという意味でも、これまでの議論が集約的にあらわれるという点でも好例であ

る。「無力」な者が力への接近を試みる方法が関係の緊密化であり、それを極度に押し進めたものが模倣 (ミミクリ) になる。美的感覚と技芸にすぐれたバクラたちは、ときに彼らを真正の女性以上に美しく見せるのであって、そこでは本物／偽物、自然／人工物の対比が相対化されてしまう。バクラたちが形象化する美は西洋 (アメリカ) をモデルとするものであるが、それが緊密化の極限としての模倣であるとしたら、それも権力とのネゴシエーションの形態のひとつである。

### III

上記のような諸事象から描き出される低地キリスト教徒のピコール社会は、自己正統化する権威を中心に秩序だって配置されるような構造をもった社会ではなく、いくつもの権威がつねに発生する可能性をもった社会である。そこでは多元的権威とうまく折り合いをつける交渉術としてのさまざまな感情を操作することが、生活の構成員として要求される。著者は、フィリピンの被った植民地経験という時間軸をさしはさむことによって、これらの日常生活を歴史的文脈に指定しようとする。

この点は、近年文化人類学において議論のさかんな植民主義研究をフォローアップしたものであるが<sup>(註3)</sup>、同時に、ピコール地方などの低地フィリピン社会が「うすい文化」、あるいは極端には「無文化」とされ民族誌記述の対象からはずされてきた視点の偏見を白日の下にさらすことにもつながる。たとえば東南アジア地域が西洋によって捉えられるのは、貴族政治体制のとのった構造化社会か、周辺的な平等社会のイメージにおいてであった。

このようなイメージから発生するのは、奇異や稀少を有意とする純粋で真正な伝統が本質的にそなわっている社会である。フィリピン研究においては、「伝統的」文化が濃厚であるとされる北部ルソン山岳民族地域やミンダナオ・ムスリム地域にとりわけ「伝統的」民族誌が集中してきたのも、この理由による。つまり、これらの地域は植民主義が見たいと思った「未開」像を提供するに好都合だったわけ

であり、この視点からは低地キリスト教徒社会には文化はないというのも当然の帰結であったわけだ。低地社会の文化概念は、政治的深部に隠蔽されてきたからである。

このような観点から本書でとり上げられている対象を記述するとすれば、婚姻に関しては伝統のしきたりがあり、呪術師は構造化された宇宙論を雄弁に語るはずである。バクラの美人コンテストなどは、そもそも民族誌の目次としては立たなかったかもしれない。事実、著者がこれらの事象に対して唯一描きうるのは、乱暴に言ってしまうと「それには一定のやり方はない」という身も蓋もないものになってしまうかねない。ただしビサヤ地方における評者の呪術調査の経験などに照らしてみても、エッセンシャルでオーセンティックな部分を呪医の知識や技術そのものに求めることは困難であるという点で、本書の記述は納得できるものである。

この種の困難は古典的民族誌のタイトルをもじって言えば、「われらピコラノ」という意識を描き出すことの困難である。そしてこの点に関して、本書の議論は低地キリスト教徒フィリピン社会であれば、多かれ少なかれ通用するのではないかという反論を招く可能性はある。著者は慎重にビサヤ地方などを対比させながら記述を進めているが、カトリシズムを受容した歴史的経験なども、低地社会一般に共通するものであるという点で一考の余地がある。これは著者ひとりに向けられた批判というより、民族誌の成果の僅少さを嘆く以上、低地フィリピン社会研究全体に突きつけられている。

#### IV

では奇異や稀少を材料としないのであれば、低地社会を記述するに資する材料とは何か。そして「一定のやり方はない」式の記述に陥らないとすれば、いかに代替するかを答えることが必要であり、この点は、フィリピン研究に埋め込まれた植民地の視点を解体すること以上に、この民族誌が成功している点であろうと思われる。

たとえば注目されるのは、カトリシズム／土着の

対比図式の相対化の試みである。この対比図式における両者の混合は、フィリピン・カトリシズムもしくはフォーク・カトリシズムとしてユニークな様態を示すことが報告されてきた。しかしこの「ユニークな混淆」という視線は、山岳少数民族やムスリムに「伝統的」で「奇異」な慣習や儀礼が見出せるとするオリエンタリズムとどれほど距離があるだろうか。そのような伝統的民族誌の対象の欠落を補填するものとしてフォーク・カトリシズムをとり上げるのは、同じ穴の貉ではないか。

著者の採った方法はカトリシズム／土着という対比だけを論ずるのではなく、それを婚姻関係における夫（方）／妻（方）、呪術における精霊／人間、女装コンテストにおける真正／贋作、といった同様のいくつもの対比に並置して提示し、この対比図式を根底からずらしてしまうやり方を民俗社会に通底するものとして焦点化させることだった。このような議論から指摘される「感情の経済」とは、「素寒貧なひとびと」が日常を生きる道具立てとして行使するものであって、あからさまな力の差異に対面したとき「無力な」農民が示す「日常型の抵抗」<sup>(注4)</sup>の議論にも通じる。

個々の行動や規範そのものから文化的アイデンティティを抽出しにくいということは、当事者がそれを言語化して表現しえないということであるが、基本的な生活の「かまえ」とでもいふべき部分が確実に実感できるとすれば、民族誌に必要なのは「ことばを知ること」である。稀少性のアイデンティティの人類学が閉塞したとしても、「素寒貧なひとびと」が所与の状況に対してどのように生活を構築していくかという文化の創造の側面を記述する仕事は、頓挫することはなかろう。日常何気なく行われる当たり前を真正面から記述することは、この意味においても、民族誌にまっとうに保証された正攻法なのである。

(注1) タガログ地方に関しては、Ileto (1970) がひとつの転換点となって多くの研究が後続したが、著者はむしろ Rafael (1988) が本書においては牽引的の意味を持つことを注記している。このほか低地フィリピン社会研究として、イロカノ地方に関しては Pertierra

(1988), ビサヤ地方に関しては Dumont (1992) などがあげられる。

(注2) 近年のヨーロッパにおけるフィリピン研究の動向に関しては、ルッテン (1996) 参照。ここでは文献紹介が省略されているが、以下のホームページにはルッテン教授の原文とともに詳細な文献リストがあげられている。hyyp://www.nepean.uws.edu.au/social/psaa/europe.html

(注3) 植民地主義研究については、山下・山本 (1997), 栗本・井野瀬 (1999) などを参照。

(注4) Scott (1985), Kerkvliet (1990) などを参照。

### 文献リスト

栗本英世・井野瀬久美恵 (編) 1999 『植民地経験』人文書院。

高取正男 1975. 『日本的思考の原型』講談社。

山下晋司・山本真鳥 (編) 1997. 『植民地主義と文化』新曜社。

ルッテン, ロザンス 1995. 高橋恵訳「ヨーロッパにおけるフィリピン研究」『通信』(88) 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。

Dumont, Jean-Paul 1992. *Visayan Vignettes*. Quezon City: Ateneo de Manila University Press.

Ileto, Reynaldo Clemena 1970. *Pasyon and Revolution*. Quezon City: Ateneo de Manila University Press.

Kerkvliet, Benedict 1990. *Everyday Politics in the Philippines*. Berkeley: University of California Press.

Pertierra, Raul 1988. *Religion, Politics, and Rationality*. Quezon City: Ateneo de Manila University Press.

Rafael, Vicente L. 1988. *Contracting Colonialism*. Ithaca: Cornell University Press.

Scott, James 1985. *Weapons of the Weak*. New Haven: Yale University Press.

(中京大学社会学部講師)